待降節第４主日主日礼拝説教

「気づいていますか？祈りの胎動に」 予稿

日本基督教団石神井教会　2021年12月19日

【旧約聖書日課】サムエル記上　2章1～10節

1ハンナは祈って言った。
「主にあってわたしの心は喜び
主にあってわたしは角を高く上げる。
わたしは敵に対して口を大きく開き
御救いを喜び祝う。
2 聖なる方は主のみ。
あなたと並ぶ者はだれもいない。
岩と頼むのはわたしたちの神のみ。
3 驕り高ぶるな、高ぶって語るな。
思い上がった言葉を口にしてはならない。
主は何事も知っておられる神
人の行いが正されずに済むであろうか。
4 勇士の弓は折られるが
よろめく者は力を帯びる。
5 食べ飽きている者はパンのために雇われ
飢えている者は再び飢えることがない。
子のない女は七人の子を産み
多くの子をもつ女は衰える。
6 主は命を絶ち、また命を与え
陰府に下し、また引き上げてくださる。
7 主は貧しくし、また富ませ
低くし、また高めてくださる。
8 弱い者を塵の中から立ち上がらせ
貧しい者を芥の中から高く上げ
高貴な者と共に座に着かせ
栄光の座を嗣業としてお与えになる。
大地のもろもろの柱は主のもの
主は世界をそれらの上に据えられた。
9 主の慈しみに生きる者の足を主は守り
主に逆らう者を闇の沈黙に落とされる。
人は力によって勝つのではない。
10 主は逆らう者を打ち砕き
天から彼らに雷鳴をとどろかされる。
主は地の果てまで裁きを及ぼし
王に力を与え
油注がれた者の角を高く上げられる。」

【福音書日課】ルカによる福音書　1章39～56節

39そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。40そして、ザ
カリアの家に入ってエリサベトに挨拶した。41マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、
その胎内の子がおどった。エリサベトは聖霊に満たされて、42声高らかに言った。「あな
たは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。43わたしの主のお
母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。44あなたの挨拶の
お声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。45主がおっしゃったこと
は必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう。」
46そこで、マリアは言った。
47「わたしの魂は主をあがめ、
わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。

48 身分の低い、この主のはしためにも
目を留めてくださったからです。
今から後、いつの世の人も
わたしを幸いな者と言うでしょう、
49 力ある方が、
わたしに偉大なことをなさいましたから。
その御名は尊く、
50 その憐れみは代々に限りなく、
主を畏れる者に及びます。
51 主はその腕で力を振るい、
思い上がる者を打ち散らし、
52 権力ある者をその座から引き降ろし、
身分の低い者を高く上げ、
53 飢えた人を良い物で満たし、
富める者を空腹のまま追い返されます。
54 その僕イスラエルを受け入れて、
憐れみをお忘れになりません、
55 わたしたちの先祖におっしゃったとおり、
アブラハムとその子孫に対してとこしえに。」
56マリアは、三か月ほどエリサベトのところに滞在してから、自分の家に帰った。

《クリスマスの御子》を迎えよう！【こども説教のために】

待降節のロウソクが 4 本灯りました。今週、わたしたちは、御子のご降誕を祝うクリスマスを迎えます。今日はまだ 5 本目の「降誕のロウソク」が灯さずに残されていますが、これもクリスマスイブの礼拝には灯すことになります。わたしたちは、まず一足先に今日の午後、子どもたちと降誕劇（ページェント）礼拝で祝いの出来事の中に進み入りましょう。

教会によっては、今日すでにクリスマスの祝いの礼拝をしているところもあるでしょう。わたしたちの教会でも、降誕日より前の日曜日にクリスマスの祝いの礼拝を設けることは多いのです。降誕日当日に礼拝を行うことが難しければ、降誕日に先だって皆が集まれる日曜日に祝いの礼拝をすることも許されるでしょう。

そもそも、待降節だからといって、迎える降誕の出来事を前もって祝ってはいけない、というわけではないでしょう。福音書の伝える降誕物語は、御子のお生まれになられる前から始まるのです。

御子の母マリアは、胎に御子を宿したかどうか定かでない先から、まず天使ガブリエルの「おめでとう、恵まれた方」（ルカ 1:28）との祝福の挨拶を受けました。彼女はまた、訪ねていったエリサベトからも、胎に宿した御子を祝福する挨拶を、声高らかに受けています。

「クリスマスを迎えようとしている皆さん、おめでとう。皆さんの心の内に、クリスマスにお生まれの御子がすでにおいでです。御父である神が、そのようにしてくださっています。」

わたしたちも、そう挨拶を始めたら良いのです。

「あなたは祝福された方」

降誕物語のクライマックスは、あの飼葉桶に寝かされた生まれたばかりの幼子を巡る場面でしょう。けれども、その時を迎えるまでの日々が、幼子の母や父にはありました。彼らは、胎に子が宿り、否応なしに誕生に備えて前に進まなければならなくなったのです。

マリアは、そのときすでにヨセフのいいなずけ、つまり婚約者であったとされています（1:27）。当時の女性が婚約して結婚の準備を始めたのは、14～15 歳であったそうです。もちろん、本人らの意志によってではなく、親の意向や周囲の者たちの計らいによって、女性も男性も結婚相手を決められたのです。それが当たり前の社会であれば、そのことに不満や不安を抱くというようなことはなかったでしょう。たとえ 14～15 歳であっても、現代人に比べたらはるかに成熟した心を持っていたかもしれません。

とは言え、まだ若い少女です。周囲の皆がしていることに倣っておればよいときには何の問題も無かったかもしれませんが、ひとたび想定外のことが自分の身に起こったならば、戸惑い、混乱し、思いがけない行動を取ってしまうようなこともあったのではないでしょうか。

天使ガブリエルから御告げを受けたとき、マリアは、大いに戸惑ったのです。今、子を宿すことは、彼女の想定を超えたことだったからです。彼女はまだ、ヨセフと一緒になっていませんでした。周囲にも、夫と一緒になる前に子を宿し、出産するような女性は、見当たらなかったでしょう。実際にいたとしても、若い少女には、そのような社会の日陰で起こっていることを知る由などなかったのです。

戸惑い、混乱したマリアが訪ねたのが、エリサベトの家です。マリアの住むナザレからエリサベトの家のあるユダヤまでは、100 キロほどの距離がありました。彼女は一人で向かったのでしょうか。ナザレの家に両親や家族はいなかったのでしょうか。伝承では彼女は早くに両親を亡くした孤児だったとも言われていますが、聖書には何も伝えられていません。少なくとも、親代わりとなる者がいたでしょう。けれども、彼女は、両親であろうと親代わりであろうと、自分の家で自分を守ってくれていた人に、今、自分の身に起こっていることを相談できませんでした。それは、起こってはならないことのように思われたからです。彼女は、戸惑い、混乱し、家を離れたのです。家出です。そして、唯一頼れそうな親類のエリサベトの家を目指しました。そこに行くしか、彼女にできることはなかったのではないでしょうか。

遠路はるばるやって来たマリアを迎えたエリサベトは、すぐに事情を呑み込んだのでしょう。挨拶を聞くや否や、彼女を祝福して受け入れたのです、「**あなたは…祝福された方…。胎内のお子さまも祝福されています**」と。

《クリスマスのマリア》を迎えよう！

エリサベトは、自らも出産を控える中、三か月もの間、マリアを自分たちの家に滞在させたと、福音書は伝えています。それは、エリサベトと夫ザカリアにとっては、決して容易なことではなかったでしょう。ただ、彼ら夫妻には、他の選択肢はなかったのです。

もう 20 年も前になりますが、初任地の大分の教会に仕えていたとき、中学を卒業したばかりの男子を数週間、預かったことがありました。わが家の長男が 1 歳になったばかりの頃で、生活も楽ではなかったのですが、母教会で世話になったご両親から頼まれて、はるばる東京から迎えたのです。彼を預かった数週間、わたしたちがしたのは、三食を出し、一緒に楽器を弾き、礼拝に出、お金のかからない観光に連れて行くことだけでした。いつまで居るともわからずに始めた滞在でしたが、数週間経ったとき、「帰ります」と言って、帰って行きました。

エリサベトは、マリアを滞在させた三か月の間、どうしていたのでしょうか。彼女はただ、胎に子を宿したマリアを受け入れ、その子の存在と母となるマリアとを祝福し続けたのではないでしょうか。何かを教え諭したり、出産に備える知恵を授けたりするというようなことは、無かったでしょう。エリサベトもまた、初めての子を宿し、出産を控えた、「新米ママ」に過ぎなかったのですから。

それでも、マリアにとって、その三か月がどれほど貴重なときだったのかと思います。「マリアの賛歌」として知られる祈りの言葉は、エリサベトに受け入れてもらったことによってこそ育まれ、紡ぎ出されたのです。

クリスマスに、わたしたちは、マリアを迎えたいのです。御子をすでに心の内に宿していながら、その意味に戸惑い、まだ道を尋ねあぐねている方々です。そのような方がすでに、わたしたちのエリサベトの家、教会を訪ねてきてくださっているのです。その皆さんの中には、信者になるつもりなどなく来られている方もあるかもしれません。けれども、皆さんの中にすでに御子が宿ってくださっていなければ、だれもここを訪ねて来られることはなかったはずです。皆さんの内で育ち始めたものがあって、わたしたちの内にすでに宿ってくださっている御子がここに導いてくださったのです。

その方に、わたしは、エリサベトと共に、声高らかに申しましょう。「あなたは祝福された方。祝福された御子を宿した方。そのあなたが、わたしたちのところ、教会に来てくださるとは。わたしの心は踊ります。わたしたちに宿ってくださっている御子が喜び踊られるからです。」

そうです。わたしたちは皆、御子を受け入れて、すべてのマリアと共に歌うことができるのです、「**わたしの魂は主をあがめます…**」と。